

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：23101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21500654

研究課題名（和文） 個人・行動・環境・健康リスクをコア概念とした薬物・アルコール依存症予防教育の画策

研究課題名（英文） Designing a new health learning program for preventing the addiction problem among youth - focusing on the relevance of individual-behavior-environment-health risks.

研究代表者

徐 淑子（SUH SOOKJA）新潟県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：40304430

研究成果の概要（和文）：

「健康リスク」を生じさせる「行動」は、「個人」と個人をめぐる「環境」との間の相互作用の中でのみ成立するという考えに立ち、若年者を主たるターゲットとする薬物・アルコール依存症予防のための健康教育案を画策した。また、その内容に対応する教材を作成した。小集団～中規模集団（学級など）でのインタラクティブな働きかけによる、健康知識の向上と自己覚知への刺激を同時に行い、保健行動や求助行動への準備性を高めることを目論んだ。

研究成果の概要（英文）：

The health risks associated with particular behaviors are embedded in the reticulation of individual and the environment s/he lives in. This study aimed to establish a new health learning program and the learning materials based on this concept. It is expected that the interactive activities of the learning program motivate the youth learners to learn about the scientific facts about health and enhance awareness for his/her vulnerability relevant to the addiction problem, and will prepare the psychological readiness to take the appropriate health behavior or the help-seeking behavior when needed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 ・ 応用健康科学

キーワード：喫煙・薬物乱用防止教育，若年者，初期介入，健康教育立案，教材作成

1. 研究開始当初の背景

日本の薬物対策は司法面でのコントロールが強力であり、違法薬物使用人口は一定の規模に抑えられてきた経緯がある。青少年の薬物乱用防止を目的とする健康教育は、「ダ

メ・ゼツタイ」の標語が象徴するとおり、第一予防に重きが置かれてきた。だが、一方、現行の一次予防ではいくつかの点で、現代の若者の健康ニーズをカバーし切れていないことが専門家・実践家の間で認識されるよう

になって来た。日本の薬物乱用防止教育は、処方薬物依存者（睡眠薬など）、安価なストリートドラッグや脱法ハーブなどの新しい薬物、合法薬物であるアルコールの若年依存者など、新しい使用者層の増大を未然に防ぐための転機を迎えているといえる。ことに、「ダメ、ゼッタイ」のポピュレーション・アプローチと平行して、一次予防におけるハイリスク・アプローチつまり、薬物使用のイニシエーション直前・直後の層（本研究では、高ニーズ若年者層と呼ぶ）を対象としたなんらかの対策が必要であると思われる。

以上の経緯より、研究代表者らは、上のような問題をカバーするあたらしい健康教育の画策を着想するに至った。本研究では、薬物・アルコール使用へのイニシエーション前後の若年者をターゲット・オーディエンスとし、薬物・アルコール依存症の問題への理解、問題解決能力（自己省察力、有効な求助行動の促進、対人関係スキル、ストレス・マネジメント・スキルなど）の向上を最終目標とし、直接的にはそれらの能力の心理的準備性を高める健康教育プログラム、その具体的な成果物である教材・資材を提案する。

本研究では、この問題を回避するために、「健康リスク」を生じさせる「行動」は、「個人」と個人をめぐる「環境」との間の相互作用の中で成立するという考えに立ち、この考えが全体に通じた健康教育内容・教材・課題設定を行う。

2. 研究の目的

以上を整理し、当該研究の研究目的として以下を示す。

- 1) 「個人」「行動」「環境」「健康リスク」をコアにした薬物・ア依存症予防教育プログラムを立案すること。
- ① ターゲット・オーディエンス：「高ニーズ若年者」とする（ハイリスク・アプローチでの対象設定）。
- ② 介入の次元：初期（一次予防およびイニシエーション直後の者を含めた「1.5次」予防）。
- ③ 取り扱う健康リスクの範囲：薬物・アルコールなど物質依存を中心とする。必要に応じ、性・恋愛などプロセス依存にも触れる。
- ④ コア概念：健康リスクから身を守るための態度、思考習慣および行動スキル形成の支援を目的とする。そのために、「個人」「行動」「環境」「健康リスク」というコア概念を健康教育内容（骨組み、

教材・資材・課題）すべてに活用する。

- 2) その具体的成果物として、高ニーズ若年者を対象とした、下記のような特色をもつ健康教育プログラム・教材・資材を開発する
- ① 教育的働きかけのチャンネルを複数併用する（「聴く」「見る」「話す」「考える」「書く」「体を動かす」などの複数行動を組み合わせた課題の設定）
- ② 回復者（ピア）の経験に題材をとり、ターゲット・オーディエンスがリアリティをもって学習に参加できる課題設定がなされている。
- ③ 教材や課題をメニュー化し、実施者が対象のニーズや教育目的、人数、時間に応じてメニューの中から選んで授業案を構成できる仕組みを取り入れる。これによって、実施者の便宜を図る。

3. 研究の方法

研究課題を5題設け、必要に応じて年度にまたがり研究期間内に実施した。

1) 研究課題1 薬物・ア依存症防止教育についての基礎情報・実践例収集

国内外の薬物乱用防止教育の実践例（指導案、教材等）の収集と情報整理をおこなった。薬物・ア依存症予防教育の実施機関、模擬授業・キャンペーン等に参加し、実施担当者より情報提供を受けた。

情報提供を受けた内容は、プログラムの実施形態、対象、教育内容、問題点。

2) 研究課題2 ターゲット・オーディエンスの特性把握-I

この課題については、国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部などによる経年的調査など、いくつかの基礎調査が存在するため、当初予定していた独自調査は実施せず、既存およびon-going研究の整理と、専門家へのヒアリングに代えることとした。

同様に、当事者グループ・回復施設をヒアリングし、情報提供を受けた。また、薬物・ア症の自助グループ活動ではライフヒストリーを他者と共有することを重視しているため、多数の文書記録（出版物、会誌・会報など）がある。これらを、国内外とわず重点的に収集した。

以上により、ア) ライフヒストリー（薬物・アルコールの使用に至った経緯、治療・回復への道につながったきっかけ、回復支援者・医療者・家族との関係など）、イ) 当事者からみた現行の健康教育への提案、ウ) 本研究

が対象とする高ニーズ若年者に伝えたいこと（経験から語る危険な場面、薬物乱用と性・メンタルヘルスの問題について、薬物にかかわろうとしている高校生へのアドバイス、現に薬物問題に直面している高校生へのアドバイス、等）の情報を充足することができた。

3) 研究課題3 薬物・ア依存症防止教育にたずさわる健康教育実施者へのニーズ調査

司法・医療の分野で未成年者を対象とした健康教育に携わる実践者（医師、保健師、養護教諭、回復者、指導員等）のうち、薬物・ア症予防教育あるいは性教育・メンタルヘルス教育など周辺分野での経験・実績・関心のある者に聞き取りを行い、以下について情報提供を受けた。ア) 健康教育提供者として必要と感じる・不足していると思われる健康教育内容・教材・資材・必要・情報 イ) 現行の健康教育実践（実践上、困難に思われる点・問題点。

4) 研究課題4 ターゲット・オーディエンスの特性把握－II－

当初、矯正施設などに入所中の15-20歳までの男女を対象としたニーズ調査を計画したが、他の研究課題とのバランスより、つぎのとおり変更した。研究班のメンバーが継続的に関与し、経年的データを取得しているA県B刑務所での成人受刑者の質問紙調査のデータを参考した。その他、既存の資料を収集整理した。

5) 研究課題5 健康教育素案画策 および研究課題6 健康教育プログラムの提案・教材作成

当事者（回復者）および健康教育に従事している者・研究者らのワーキンググループを編成し、ターゲットのライフスタイルに密着したリアリティのある内容、映像、ロールプレイ、ワークの着想、題材をプールした。そして、それにもとづき、健康教育プログラムおよびその教材の素案を画策した。

4. 研究成果

1) 研究課題1 薬物・アルコール依存症防止教育についての基礎情報・実践例収集

① 国内外の薬物・アルコール依存症回復施設を訪問して情報を収集し、日本国内に現存する予防・ケア資源との比較検討を行った。先進国・途上国を問わず、司法的

な介入を通じて依存症ケア資源にアクセスするルートのある国々では、回復施設、専門医療機関、自助グループなどの社会的認知度が高く、予防教育を含めた対策実施に対する世論の確立・社会の受け入れが一定のレベルに達していた。その一方で、犯罪予防、矯正・更正・社会的不平等か自己責任かなど、価値や利益の対立にもとづいた激しい社会的議論が絶えない様子も伺えた。一方、日本でも、米国の例をもとに、「ドラッグ・コート」制度の導入を求める動きがあり、「ダメ、ゼッタイ」を越える対策へ向けて当事者連携し、活動が進められていることを付記する。

② オランダ、イギリス、フランス、ベルギー、イタリア等ヨーロッパ、米国の一部の州では、ケースによっては薬物使用についての法的処罰より、使用者を医療へ導入することが優先されるシステムをとっている。そのため、バー・クラブなど若者が集まる場所などでの対策（アウトリーチ活動）が実施しやすい。その結果、学校教育場面やコミュニティでのポピュレーション・アプローチ、アウトリーチではハイリスク・アプローチと、ターゲットおよび目的別の、プログラムの性格分け明確であった。

また、アウトリーチの対象者は司法的な問題を恐れる必要がないので、警察に通報される心配なく医療・相談機関に求助行動help-seeking behaviorを起こせる。対策を実施する側は、当事者やクラブ経営者の理解・協力が得やすいので、当事者起用のピアエデュケーションなど、対象者のニーズに沿った対策を実施しやすい。さらに、以上のことだけでなく、評価などに有用な行動疫学的な調査も行いやすいという利点もあった。

③ 各国では、多種多様な健康教育が行われていたが、ハイリスク者へは、情報提供、個別相談・カウンセリング、受療行動支援が主な内容となっていた。若年の薬物使用者とかれらが所属する下位文化集団（サブカルチャー）との関係性から、各国の実践例では、以下のような配慮が見られた。ハイリスク者への働きかけは、ア) 健康教育実施者が対象者のサブカルチャーを尊重する姿勢を示す
イ) 反社会的行動や問題行動の特定が目的でないことをはっきり示す
ウ) 教条主義的な情報伝達ではなく、かれらの自己決定を支援するための情報提

供を行いたいことを示す

エ) 当事者同士や当事者—健康教育実施者間の対話の中に、問題解決の選択肢が浮かび上がるような働きかけを行う

オ) 最終的な結論は、基本的に当事者本人が出す。健康教育者はそれに対し、道徳的判断は下さない。

- ④ 各国でのヒアリングの際、実際にアウトリーチ・プログラムで使用されている健康教育資材を提供してもらい、内容整理を行った。資材の種類は、フライヤー、パンフレット、ポスター、啓発バッジやTシャツ、ウェブサイト情報、その他アウトリーチ活動で配布するインセンティブ、ドロップインセンターや回復施設の啓発部門で開発・使用されているゲームや教材など。

これらの結果を、課題5およびで、当該研究の成果物であるプログラムと教材に反映させた。

2) 研究課題2 ターゲット・オーディエンスの特性把握—I—

健康教育ニーズを明らかにする目的で、当事者・回復者へのヒアリングと資料調査を実施した。

その結果、当該研究の対象となる高ニーズ若年者には、つぎのような特徴があることが指摘された。これらを、研究課題5および6の健康教育プログラムおよび教材の策定に反映させた。

- ① 健康情報一般への関心が低い
- ② 健康リスクの見積もりや現実吟味の範囲が狭い。あるいは、リスクをよく吟味する習慣があまりない
- ③ 意思決定の時間軸が比較的短気である。将来の自己像を想定しながら現在の状況を結びつけて健康行動をとることが重視されないことがある
- ④ ストレス対処行動のバリエーションがじゅうぶん開拓されていないことがある。あるいは、逃避的対処行動など特定の方向性に限定されていることがある。
- ⑤ 自己の状況を言語化することが不得手であるため、求助行動が起こせないことがある
- ⑥ 健康リスクについてのボキャブラリーが不足しているため、他者にニーズが伝わらないことがある
- ⑦ 教室場面が苦手である、あるいは相談場面を経験したことがない

⑧ サブカルチャーとのむすびつき、権威主義や教条主義への反発

⑨ 健康教育者への誤解、不信感（道徳的判断をくだされることの恐れや拒否感、それまでの学校や年長者との関係から偽悪的態度をとっている、友人から引き離されるのではという恐れ 等）

その他、ニーズが高いにもかかわらず、公式的な働きかけが用意されておらず、情報源が不足しがちなのは、依存症者を家族員にもつ若年者（とくに児童・生徒）であることが示唆された。

3) 研究課題3 薬物・ア依存症防止教育にたざさわる健康教育実施者へのニーズ調査

性教育、エイズ教育、自殺防止教育、メンタルヘルスとライフスキル教育の実践に関する保健体育科教諭、養護教諭等にヒアリングを行い、情報提供を受けた。健康教育実施者は、つぎの諸点を問題と考えていることが明らかになった。

- ① 学校教育では、現行のカリキュラムの中で、薬物・アルコール問題にじゅうぶんな時間が割けない
- ② どのような取り組みが有効なのか、わからない。中途半端なとりくみは、生徒を刺激したり、無用の知識を増やすことになり、逆に、生徒が薬物使用やアルコール摂取への興味をもつのではないかと不安
- ③ 依存症についての継続的な取り組みを行うには、保護者や学校の理解を得るところから始めなくてはならない
- ④ グループワークのやりかたがわからない。あるいは、グループワークを依存症のテーマに沿って展開する方法がわからない
- ⑤ 外部講師に委託して特別授業を行うことがあるが、そのやり方でよいのか判断に自信がない。外部資源をうまく活用する方法がわからない
- ⑥ 学校教育の場合、教育機関として、「ダメ、ゼッタイ」以上の教育をやることの妥当性がどれほどあるのか、確信がもてない。

また、養護教諭や保健師等は、高ニーズ生徒から支援を求められた場合を想定し、個別対応やフォローアップについて、以下のようなことがらを問題と感じていた。これらは、当該研究成果物の教材を作成する際、指導者テキストで取り上げることにした。

- ① 依存症以外の問題を支援した経験からも、

家族、学外者・関連諸機関との連携が重要という認識はあるが、依存症の場合、連携先がわからない・みつからない

- ② 法律についての知識・情報が不足しており、自分の判断や、かかわり方に自信がもてない。
- ③ 自分の価値とそぐわず、問題への関心を継続することがむずかしい
- ④ まきこまれの問題。かかわりの範囲が無限に広がって行き、切りがなくなるのではないかという懸念。
- ⑤ 個別対応で生徒の家族がキーパーソンとして関与する場合、プライバシーにどこまで立ち入って生徒の支援を行うべきか、判断に自信がない

最後に、情報提供者の意見の多くが、性教育・エイズ教育実践者の間で経験されている問題点との類似がみられた。薬物教育における「特殊児童・生徒から一般生徒」への対象拡大にともなう問題点であると思われた。

4) 研究課題4 ターゲット・オーディエンスの特性把握－II－

研究メンバー各自の現在過去の研究および他の研究者から提供された情報を整理した。また、当該研究終了後の、次の研究サイクルでの独自継続調査に備えた。研究課題4での論点は、以下のとおりである。

- ① 薬物事犯の再犯者は中卒（以下）で統計的有意に多いことが明らかであり、高ニーズ若年者重視のアプローチで汎用性の高い教材にするためには、「中学校生徒程度の理解力をもつ者が理解納得できる内容」が、ひとつの基準となる。
- ② 健康リスクー環境ー自己（対象者）の関係知覚、それにもとづく保健行動の生起を向上させるといった視点での健康教育は、それ自体が新しい考えである。一方、日本における依存症治療のあたらしい試みとして、今現在、認知行動療法の普及がすすめられている。健康リスクの認知と保健行動の生起を説明する理論は、認知行動療法と同様、行動主義心理学にその源流を求めることができ、当該研究が提案する健康教育プログラムとの連続性や接続について、検討した。
- ③ 問題点②への回答として、当該研究のめざすプログラムと教材の位置づけは、「健康教育」としてのものである、健康情報の取得や自他の健康への配慮、健康

行動・リスク回避行動・求助行動が生起しやすくなるよう、準備性（レディネス）を高めることまでが目的であることを明確化した。

5) 課題5 健康教育素案画策および課題6 健康教育プログラムの提案・教材作成

研究メンバー各自の過去の研究／実践の実績および本研究にて収集した諸外国での教育実践例を整理し、教育方法論および教育内容勘案、教材化／課題化の準備を進めた。

また、研究課題1から4までの結果を総括し最終的に、以下の方針を決定して教材作成（試作案）を行った。

- ① 教材の使用対象である「高ニーズ若年者」を「薬物や酒の摂取経験がある、または、使用に興味がある、または、家族に依存症をもつ者がいる、13歳以上25歳までの若年者」と位置づけた。
- ② 使用する場面は、学校、地域、当事者グループの子どもらの会等を想定した。
- ③ 教材の課題設定は、小集団のインタラクティブなワーク中心とした。医療機関でのプレ・セラピー（集団療法を導入する以前におこなうウォームアップ的活動）、デイケアなどでの学習活動への応用の可能性も考慮した。
- ④ 対象者が練習あるいは体験する行動として、以下のカテゴリーを設定した。
ア) 健康と依存症について知ること（健康情報の取得）、ストレス対処、イ) じぶん自身について知ること（自己覚知の向上）、じぶんのいごこちのよい場所、安全な場所さがし（心理的安全の体験）、ウ) 言語化練習とボキャブラリーの増大、建設的な感情表明の練習、自己開示の範囲を自身で決めること、エ) いくつかの選択肢から一つを選ぶ練習（可能性の吟味と自己決定の練習）を設定した。
- ⑤ ④に沿って、30のワークを作成した。一般生徒・児童にも適用可能なワークについては、注意書きとともにその旨を記した。ファシリテータマニュアルおよびファシリテータ向け関連資料集の草案を作成した
- ⑥ 健康教育実施者自身がファシリテートとしながら、対象者とともに考え自己理解をすすめることができる内容をめざした。研究課題3で明らかになった実施者自身の葛藤という問題に対応する。
- ⑦ 健康教育実施者用学習テキストに、非差別的実践 anti-discriminatory practiceの

章を設けた。

研究期間終了後は、研究にあたり情報提供などで協力を得た機関、団体、グループでのトライアルを行い、完成版の作成と普及を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 葛西賢太(2010): もうひとつの知-アルコール依存症者たちの体験とスピリチュアリティ, 現代思想, 査読なし, 38(14), 158-170.
- ② 野坂祐子(2010a): 現代を生きる高校生のための性教育, 心理臨床の広場, 3(2), 24-25.
- ③ 野坂祐子(2010b): HIV 陽性者のストレスマネジメント ~グループワークの実践から~, 伝えたい・学びたい HIV カウンセリング(新潟大学医学総合病院), 査読なし, 3号, 29-33.

[学会発表] (計5件)

- ① 近藤千春他5名(2011): 0病院におけるアルコール依存症患者を対象にした SMARPP 実施における集団 凝集性とその効果について, 第46回日本アルコール・薬物医学会, 平成23年10月13日, ウィンク愛知.
- ② 徐淑子(2010a): 健康教育のメッセージをよりよく届けるために, 日本助産師会新潟県支部研修会, 2010年9月11日, 新潟県立看護大学.
- ③ 徐淑子(2010b): 依存症は「学校」でどう教えられているか, 第226回アルコール問題を考える集い, 2010年5月23日, 東村山市中央公民館.
- ④ 近藤千春(2009): 薬物乱用の予防教育の画策にあたっての予備的研究, 藤田医学会, 2009年10月2日, 藤田保健医療大学.
- ⑤ 徐淑子(2009): 日本の薬物・アルコール依存症ケアシステムと予防教育概観, 依存症予防教育研究会, 2009年7月11日, フロラシオン青山.

[図書] (計3件)

- ① 徐淑子(2011): 薬物・アルコール依存症の当事者体験談を聞くことについて, みまもる・つながる・うけとめる-2-, 学校における自殺リスクの認知とその対応に関する調査報告, 大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター, 82-84.
- ② 近藤千春(分担執筆), (2011): アディクション看護の実際~ダルクと看護の連

携, アディクション看護学松下年子, 日下修一 編著薬物依存症, メヂカルフレンド社.

- ③ 葛西賢太(2010): 現代瞑想論, 春秋社, 東京.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徐淑子 (SUH SOOKJA)
新潟県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号: 40304430

(2) 研究分担者

近藤千春 (KONDOH CHIHARU)
藤田保健衛生大学・医療衛生学部・准教授
研究者番号: 60331576

葛西賢太 (KASAI KENTA)
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号: 00281014

野坂祐子 (NOSAKA SACHIKO)
大阪教育大学・学校危機メンタルサポートセンター・准教授
研究者番号: 20379324

(3) 連携研究者

()

研究者番号: